

毎年十月初旬から中旬には、ノーベル文学賞の選考結果が発表されるので、その直前にマスコミ関係者は、今年誰が受賞するかを予想することに必死になる。そして、この数年來、最大の関心事は、今年こそは村上春樹が受賞するだろうか、ということだ。しかし、ノーベル文学賞の選考過程は五十年間一切秘密だし、そもそも候補の名前が公表されるわけでもない。誰が有力候補だと取り沙汰したところで、じつは受賞者の予測を賭けの対象にしてイギリスのブック

メーカー(賭け屋)が発表するオッズ

川上未映子「ミス・アイスサンドイッチ」

世界の構図鮮やかに

住んで工房を構え、陶芸に専念しようとしたとたん、

もつとも、ブックメーカーが発表するリストは、まったく無意味というわけでもない。このリストの上位に挙げられる世界の作家の多くの名前を見ていつも痛感するの

残酷さと心優しさと

綿矢りさ

「いなかの、すとーカー」

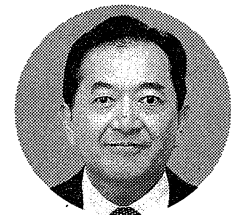
彼に勝手に恋した年上の女性

ト上位作家たちの誰一人として、日本では「有名」とは言いがたい。意味のない臆測にあくせくするより、文芸ジャーナリズムはこれらの知られざる大作家たちの紹介に努めるべきではないか。ノーベル賞発表の月を、「世界文学月間」としたっていいのだ。



閑話休題。日本の文芸誌に戻ろう。今月は二つの傑作があった。まず、川上未映子の中編「ミス・アイスサンドイッチ」(『新潮』)。「ぼく」

女性は、アイスキャンデーのような水色に塗られたまぶたの大きな目を持っていて、どよやら整形に失敗したような顔立ちらしいのだが、「ぼく」は彼女に惹かれ、心を込めて彼女の絵を描く。映画の戦闘場面に異様にのめりこみ、「できるだけ今度っていうのがない世界の住人」と自称する、同級生のヘガティという女子もじつに際だったキャラクタード。ちなみに「ヘガティ」というのもちよつと尾籠な(こころ)ではあえ



田中康夫氏

歴史は繰り返す、という。だからこそ、不幸なそれは繰り返さないように注意深く学ばねばならない。その点で、『文学界』

大波小波

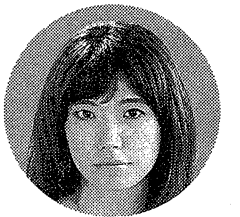
の創刊八十年特集の中で、半藤一利『文学界』の昭和史」は非常に参考になる。「戦時下の編集後記を中心として」という副題から明らかなよ

官僚文学と文学者

自身がなかなか原稿を出さなかつたことなど、編集の苦労は推して知るべしだが、やはり最大の問題は戦時の権力の介入だった。

作家たちの戦争協力の研究は進んでいるが、雑誌の編集後記に注目したものは珍しい。出色なのは、当局から出頭を求められて息巻

第でどうにでもなる規制によって、発禁を繰り返されながらの発行である。官僚たちの手管をもってすれば文学者の懐柔など赤子の手をひねるようなものだった。しかし、面白がってばかりはいられない。特定秘密保護法案なるものが衆院に提出された。様々な拡大解釈の余地のある文面を、現代の文学者たちはどう読むのだろう。(玉虫)



川上未映子氏

の一人称により、謎めいた数字の羅列で始まる物語は、初めのうち混沌とした印象を与えるが、次第に分かってくるのは、「ぼく」が小学四年生で、スパーのサンドイッチ売り場の大人の女性にどうやら恋をしているらしい、ということだ。彼が心中「ミス・アイスサンドイッチ」と呼ぶ

て種明かししない)あだ名で、作品全体が「ぼく」の目を通した名付けの世界になっているとも言えるだろう。幼い子供の視点を通じて、このように繊細で複雑な世界の構図を、嘘くさくなく鮮やかに描き出すのは至難の業だが、川上はそれを軽々とやってみせてくれる。

次に綿矢りさの中編「いなかの、すとーカー」(『群像』)も強烈な印象を残す。若くして注目された陶芸家が郷里の田舎に住んで工房を構え、陶芸に専念しようとしたとたん、

性ストーリーに連日つきまわられる。これだけだったら、それこそ夢野久作が「いなかの、じけん」で取り上げそうな猟奇譚止まりだろうが、綿矢はここで、陶芸家を兄のように慕ってきた同郷の幼なじみの女性の恐るべき復讐心を絡ませ、物語は予想外の展開を見る。最終的にはス

トーカーを引き寄せてしまう男の無責任さまでがあぶり出され、面白く、残酷であるとともに、心優しい部分も残したい小説になった。

『文藝』冬号では、なんと、あの田中康夫の久々の長編「33年後のなんとなく、クリスタル」の連載が始まった。田中が「なんとなく、クリスタル」(一九八〇年)で文藝賞を受賞してデビューしてから、もうそれだけの歳月がたったのだ。今回の小説では、すでに結婚し、子供代わりに犬を可愛がっている田中本人とおぼしき人物(僕)が、デビュー作のヒロイン由利と、洗練されたフランス料理店で再会し、料理と酒に蘊蓄を傾けながら、来し方を振り返る。まだ連載の第一回なので、全体がどうなるかは何とも言えないが、強く印象づけられたのは、この三十数年で(その間に田中は政治家として活躍し、阪神淡路大震災のときはボランティア活動にも励んだ)、時代がすっかり変わってしまったということだ。「なんとなく、クリスタル」はブランド名を羅列したカタログ小説として世間を驚かせ、いまや日本におけるポストモダン文学史を語るときに、高橋源一郎の「さようなら、ギャングたち」とともにその原点に位置づけられる歴史的な作品として評価されているのだが、今回の作品で登場人物たちは、当時まだ影も形もなかった携帯電話、フェイスブック、ツイッターなどを駆使して連絡を取り合っている。私たちはいまや、ポストモダンのその先に何があるのか、見通すことを迫られる時代に突入したということだろうか。

(ぬまの・みつよし)東京大文学部教授、ロシア東欧文学・現代文学論